

ご注意事項《必ずご一読ください》

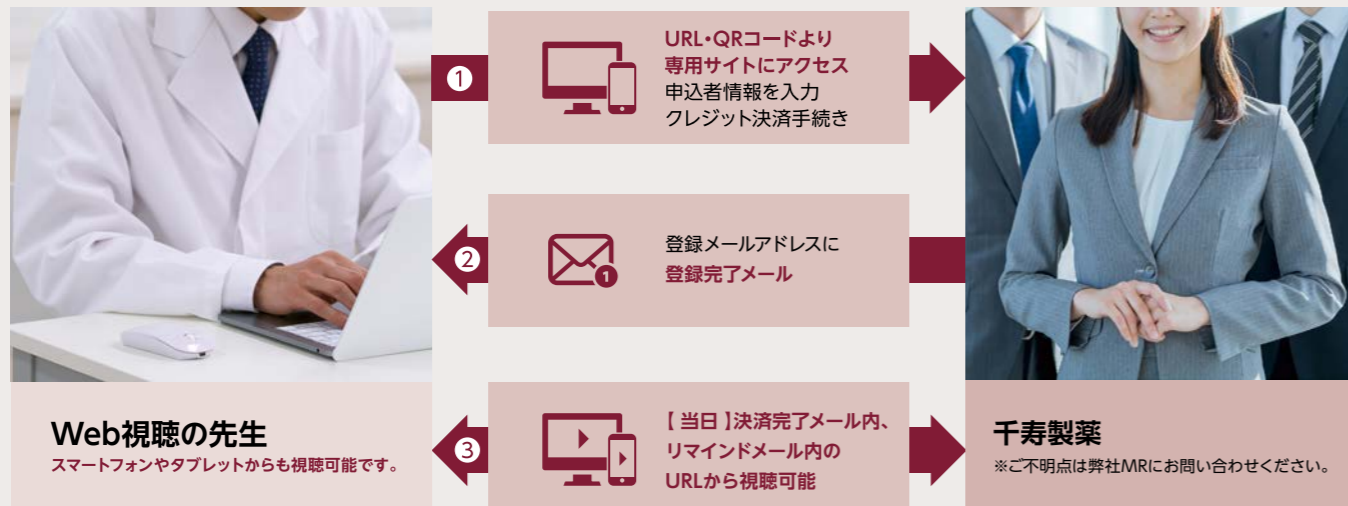
- 01** 日本眼科学会専門医制度委員会の見解より、
- ・ご来場の先生は3単位、Web視聴の先生は2単位を取得できます。
 - ・Web視聴の場合、関東圏に勤務もしくは居住の先生、東京医大医局OB,OGの先生のみ単位を取得できます。
 - ・2020年10月以降、Web視聴でも単位取得に会費徴収が必要となりました。
- 02** ■ 参加費
会場参加の場合は現地でのお支払い、Web視聴の場合はクレジット決済のみ受け付けております。
- 03** ■ ご来場予定の先生へ
- ・参加費は【当日・会場にて現金】でお支払いください。
 - ・COVID-19の感染状況によっては、Web開催のみに切り替わる可能性があります。
- 04** ■ Web視聴予定の先生へ
- ・ご登録は、下記URLやQRコードから事前登録をお願い致します。
 - ・参加費のお支払い方法は【クレジットカード決済】のみとなります。クレジット決済をもって視聴用URLを送信させていただきます。
 - ・ご不明点は、弊社担当MRにお問い合わせください。
- ご理解・ご協力のほどお願い申し上げます。

Web視聴事前登録URL <https://sec.tobutoptours.co.jp/web/evt/tokyoidai100/>



↑ 事前登録QRコード
こちらを読み取ってください。

ご登録の流れ



懇話会 眼科臨床 東京医大

第100回

東京医大眼科臨床懇話会

2022 2月12日(土)17:00~

専門医認定事業 認定No.59034 / 会場参加者:3単位 Web参加者:2単位

場所：ハイアットリージェンシー東京 センチュールーム
(現地開催およびWeb開催の併用)

会費：1,000円

状況が許せば情報交換会を予定しております

座長：後藤 浩 先生(東京医科大学 眼科 主任教授)

- 講演01 「日本における眼科の歴史」 熊本大学 名誉教授 谷原 秀信 先生
- 講演02 「白内障手術の歴史」 医療法人社団江山会 江口眼科病院院長 江口 秀一郎 先生
- 講演03 「緑内障手術の歴史」 四谷しらと眼科院長 白土 城照 先生
- 講演04 「眼科医療機器の歴史と変遷」 医療法人明星会 園田病院院長 園田 真也 先生

※演者の都合で当日に講演順が変更となる可能性があります。

※COVID-19の急激な感染拡大の場合には会場開催を中止する可能性もありますので、状況に応じて、下記連絡先まで開催の有無をお問い合わせください。

toshiki-mizunuma@senju.co.jp または 080-8335-0410 千寿製薬株式会社 水沼

共催：新都心眼科臨床懇話会・千寿製薬株式会社



熊本大学 名誉教授 谷原 秀信 先生

我が国における学問体系としての眼科学の始まりは、中国を経由した大陸文化の輸入によって大きな影響を受けている。そのため、その理論は、東洋哲学思想である陰陽五行説の影響が色濃く反映されている。その後、眼科を生業とする医家が成立し、多くの眼科流派へと発展を遂げながら、日本中に流布していった。さらに学問体系としての眼科学における大きな変革は、江戸中期以降の蘭学(西洋医学)の輸入によってもたらされた。漢学由来の古典的な東洋医学と長崎経由で輸入された西洋医学が競合・併存する時代を経て、江戸後期から明治期にかけては、国策として西洋医学が輸入されるようになった。その後、帝国大学を中心としたアカデミアと医療体制の整備に伴って、近代眼科学が全国に定着していく。本講演では、我が国における眼科学の黎明期の文献的史料を紹介するとともに、学問体系として眼科学の進歩の歴史を概説したい。

【利益相反公表基準:該当】無

【倫理審査:該当】無

【IC:該当】無

略歴

1985年 京都大学医学部卒業	2001年 熊本大学医学部眼科教授
1989年 京都大学助手・南カリフォルニア大学留学	2013年 熊本大学副学長・医学部附属病院長(併任)
1993年 マイアミ大学留学	2018年 熊本大学副学長・医学部附属病院長(専任)
1996年 京都大学医学部眼科講師	2019年 熊本大学理事・副学長・病院長(専任)
1999年 天理よろづ相談所病院眼科部長	2021年 美瑛町

江口眼科病院 江口 秀一郎 先生

Couching(墜下法)に代表される白内障手術は、古代から行われてきた。文献的に最古の記録はサンスクリット語で記載された紀元前 600～1000 年頃の Susrta による墜下法手術の記載である。その後この手術がエジプトやペルシャ、ギリシャに広まり、ローマ帝国時代には Celsus の百科事典に墜下法手技の記載、Galenus 等の手術記録が残っている。長きに渡り、白内障の病因は眼内の混濁した液体と考えられており、治療法としての墜下法手術は 1000 年以上、世界中で施術されたが、17 世紀中頃からヨーロッパ各国で墜下法術中に前房内に脱臼した水晶体を角膜切開にて摘出した報告がなされ、水晶体の混濁が白内障の病因である事が認識され始めた。1745 年、Daviel により計画的に角膜切開より白内障を取り出す手術が開始されたが、その後、多くの追試、論争が続き、水晶体摘出術が白内障治療の主流として受容されるのに 1 世紀を要している。20 世紀に入り Ridley による眼内レンズ開発、Kelman による超音波乳化吸引装置の開発とその後の普及は多くの眼科医の知る所である。

どの様に新しい手術でも突然新たな術式が生み出された訳ではなく、従来の手術と必ず何らかの関係を持っており、手術法の発展は病態理解の

進歩、医学、科学更には社会の発展と密接な関連を有している。今後も更なる白内障治療法の開発が続くことを期待したい。

【利益相反公表基準:該当】無

【倫理審査:該当】無

【IC:該当】無

略歴

1981年 日本大学医学部卒、東京大学医学部眼科学教室入局	1995年 東京大学医学部眼科専任講師
1985年 公立昭和病院眼科医員	1997年 江口眼科病院副院長
1988年 東京大学医学部眼科講師(病棟医長)	2004年 江口眼科病院院長
1993年 カリフォルニア大学サンフランシスコ校眼科客員教授	

四谷しらと眼科 白土 城照 先生

緑内障治療の歴史は1856年の von Graefe が行った虹彩切除術にはじまる。

von Graefe は虹彩切除によって角膜ぶどう腫が平坦化することに気づき、緑内障眼での眼圧下降に適應した。1869年には de Wecker が虹彩切除術時にみられた結膜下濾過癬痕が眼圧下降の原理であるとして強膜切開術を提唱した。さらにde Wecker は1876年には強膜への金糸挿入術を報告した。これらの術式は現在の濾過手術やインプラント併用濾過手術へと発展した。1905年には Heine が水晶体摘出術後の脈絡膜剥離による眼圧下降をヒントに毛様体解離術を報告し、この術式は現在の上脈絡膜腔へのインプラント挿入術へと発展した。流出障害の主座である隅角への手術は 1936年、Barkanによって隅角切開術として報告され、1960年には Brian と Smith によって線維柱帯切開術が報告された。1968年にはCarins が強膜弁下でシュレム管—線維柱帯を切除しその断端から房水をシュレム管へ導入する術式を開発、線維柱帯切除術と命名した。実際の奏功機序は従来の濾過手術と同じ結膜下への濾過であったが、強膜弁があることの安全性から従来の直接的濾過手術に替わる術式として普及した。

現在の緑内障手術は低侵襲な MIGS が主流となりつつあるが、本講演ではそれらの手術のルーツとなった緑内障手術の歴史について解説する。

略歴

1975年 東京慈恵会医科大学卒業	1994年 東京大学医学部助教授
東京大学附属病院眼科学教室入局	1998年 東京医科大学助教授八王子医療センター眼科部長
1983年 東京大学医学部講師	1999年 東京医科大学教授
1986年 文部省長期在外研究員	2005年 四谷しらと眼科開設

園田病院 園田 真也 先生

眼科の長い歴史の中、様々な機器が生み出され、時代の変遷に伴い淘汰や発展を遂げてきた。本発表では、眼科における近代と前近代の分水嶺となった「眼底を診る事」のために発達してきた検眼鏡→細隙灯顕微鏡→手術顕微鏡の開発の流れにスポットを当てて論じていく。日本眼科は江戸中期までは低調であり、目立った器材の発展はみられないが、西洋に発する近代眼科の流入に伴い、診療及び手術機器に大きな発展が見られるようになった。

1851年Helmholz によって発明された検眼鏡は、現在の物と異なり、光源を内蔵していなかった。当初は太陽光などを光源とし、以降石油ランプ、アーク灯、電球などへと変遷してきた。また乏しい光を眼底に収束するため、長い間眼科外来に暗室は必須であった。20 世紀初めには光源を内蔵した検眼鏡が実用化され、診断や教育の発展に大きく寄与した。

1912年 Gullustrand により細隙灯顕微鏡も開発され、我が国でも早々に導入された。特筆すべき事は、早い時期に国産化され、国情に合わせて発展させたことである。

1951年Carl Zeiss 社により眼科手術用の顕微鏡が開発され、手術中に前眼部から眼底まで診ることが可能になった。また近年 OCT も開発され、観察においては人間の能力を凌駕し、さらなる発展を遂げようとしている。

眼科医療機器の発展経過を俯瞰することで、より良い物へと工夫を重ねた先人の苦勞を偲び、今後のさらなる発展の一助になればと願う。

【利益相反公表基準:該当】無

【倫理審査:該当】無

【IC:該当】無

略歴

1994年 久留米大学医学部卒業	2014年 公益財団法人研医学会研究員
2009年 日本医史学会評議員	2016年 園田病院院長
2013年 日本医史学会理事	2018年 第 119 回日本医史学会学術大会及び総会会長